# お光狂乱　常磐津　全詞章

常磐津　瀬川如皐　述　本名題『初恋千草の濡事』　別題『お光物狂』　作曲者・初演年不詳

篠を束ねて突くやな雨に、濡夕立の空晴て
ヲヽイヲヽイ長吉さん、一緒に行から待てお呉なよ
川辺うきたつ涼み船、名代名うての楊弓に、箭取娘の仇者はお客の的もそんじよそれ、船を勘ひて船公は芸者の口を約束の
あきられて散るや木の葉の私の身にも仇な嵐が吹わいな
畜生め、心意気をやりやアがる、其通りだらう
ヲヤお気の毒
あじに搦んで駒止の、石原近く浮れ来る
矢的屋のお竹さん、両国へ店を出しながら、此河岸通へ廻り道かへ
夫でも先刻の夕立で夜店も張て居られぬ故、中の郷の姉さんの所へ、用達に行た帰りがけ
其中の郷が怪しいな怪しいな
イエ私よりお前こそ、何と思つて今頃に、此川端を唯一人で
ハテお前も知つて居る山家屋の、別荘迄旦那を送り、船は小梅の締切へ、頼んで置て両国迄の行がけだ、マア何にしてもいゝ所で逢た
話して行なと夕潮の、彼方の川辺に声々に
気違よ気違よ
囃し立られ道柴に、露の涙のかこち草、男故にや狂ふらん
結びてし甲斐も縁の糸萩と、散す野分のうたてやつらや、行方何処と白露の、お光が心乱れ髪、さらさら更にわくかたも、泣てひぐらし夫かうろげは、野暮とやらぢやと笑ふは花の、八重に色付く一重に
開く、こちの心は汲もせで、余所にかはした妹脊草、盛りも見せで散るならば、共に連てはくれもせで、エヽ憎い程尚川の面、水に中よき浮寐鳥、二人は夫と立寄て
ソリヤ此子が野咲のお光さんかへ
そうよ久松殿の許嫁
何ぢや久松さんぢやと胸づくし
アヽコレサどうするどうする
エヽ聞へぬわいナア久松さん
はでな噂を聞てさへ、癪といふものつい覚へ、在所生れの私でも、許嫁すりや女房ぢやもの、恪気の仕様は知ながら、言で月日をくよくよと、松に時雨のお染さん、連て倶々駆落と、聞て身も世もあら
憎や、我夫かせうき人を、其処か爰かと追風に、姿しどなく伏転ぶ
これは飛だ掛り合だはへ
可愛想にどうぞして、気の静まるお守は御座んせぬかへ
さうよナア、守といつては何もない、水天宮様と此間先達から大山の守太刀、是で悪魔をさつぱりと
払ひ清め奉る、お御嶽石尊大権現、抱て念願上首尾と、君が袖褄彦山讃岐にどうぞ逢夜を松山も、先ぢや白峰白耆に御苦労、大山葛城夜山にしつぽり中宿へ、山上大峰釈迦が嶽
こけの行者の御祈念に、慎み給ふと加持しける
お光はすつくと
アレアレアレそれそれそれ
恋しき人を都鳥、ありやなしや現なく、とめるを払ひ振切て、あてどと波の川岸を、狂ひ慕ふて走り行く
コレコレ姉さん待ねへよ待ねへよ
夫ぢやといふてアノ様に気が違ふて居る物を
夫だからあぶねへわナ、ヲイ姉さん姉さん
のび上る引寄て
お前も余程浮気者だね、女子さへ見りや誰彼の、ほんに嫌ひも夏木立、アノ柳湯へ行度に、気休め口を真に受けて、夫と思ふて染浴衣、まゝ鳴海の比翼紋、末は互ひにどうして斯してと、辛気しかくも
女気の、明て言れぬ胸の内
察して呉たがよいわいな
へゝなぞと体よく其方から、船の舳と突出すて、乗かへ船か送り船
ヲヤよしてもお呉れと果しなき
河辺に漕寄る筏より息吹返す善六が
アヽ苦しい苦しいうぬはお染久松逃さぬぞと、藪から棒
そういふおのれは若竹の長吉か
ヤわりやアア悪玉の善六だナ
いゝ所へうしやアがつたな
二人の奴等は何処へ逃した、お染ヤイ
蛙一ひよこ三ひよこ三ひよこ
什麼な事は知ぬわいな
油屋お染がじよなじよなじよ蚰蜒
番頭さんは這々此奴は妙見柳島
と言間に落たる手紙を見つけ
久しい松の白蛇で参りやせう
ヨヤ面白さうな此文は
ヨヤ面白さうな此文は
ヨヤ大切の其の手紙
ヘいこで
ヨヤ大切の其の手紙
ちよん
サア取て見やれ
ヘいこで
サア取て見やれ
ちよん
サア取て見やれ取て見やれと差出せば
ヘいこでヘいこで
どつこいさの文
ちよちよんがちよん、ちよんちよんちよん
取んとすれど腰が立ぬ
追かけ廻る其内に、以前の手紙の封を切り
蛙のやうにひよいひよいとお飛
シテ其名宛は
ひよいひよいと飛ぞ、ひよいひよいひよいひよい
善六様へ、横島弥仲太
蛙一ひよこ三ひよこ三ひよこ
宝の行端を詮議の手掛り、コリヤいゝ物が手に入たはへ
油屋お染がじよなじよなじよ蚰蜒
寮に御座んす旦那の所へ
番頭さんは這々此奴は妙見柳島
持て行れてたまるものか
久しい松の白蛇で参りやせう